

Title	伝統産業：移り変わる伝統
Author(s)	池本, 幸生
Citation	重点領域研究総合的地域研究成果報告書シリーズ：総合的地域研究の手法確立：世界と地域の共存のパラダイムを求めて (1996), 31: 23-26
Issue Date	1996-11-30
URL	http://hdl.handle.net/2433/187690
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

伝統産業：移り変わる伝統¹

はじめに

筆者は東北タイのヤソトンの三角枕のことをこの数年調べてきた¹。しかし、東南アジアを伝統産業というキーワードで切るということは筆者の守備範囲から考えても不可能である。それはタイ以外の東南アジアのことにも、また東南アジア以外の地域のことにも詳しくないからであり、タイで見られる現象が普遍的に見られる現象かもしれないからである。そこで、ここではタイや日本の伝統産業から考えたことについて述べてみたい。

伝統産業の定義

まず「伝統産業」の定義を考えてみたい。広辞苑には「伝統産業」という言葉は載っていない。日本語大辞典にも「伝統産業」はないが「伝統工業」はあり、「在来工業」参照とあるので、そちらを見ると「江戸時代以前から続いている土着的な工業。和紙、刃物、漆器など手工業的な家内工業が多い」となっている。ついでに広辞苑の「在来工業」を見ると「明治以後に西欧から移植された近代工業に対して、明治維新前に国内に発達の起源をもつ工業の称。手工業的技術がうけつがれ、多く陶磁器・織物などの生産に見られる」としている。さらに手元に宗藤・黒末（参考文献参照）があるのでそれを参照すると「伝統産業は、封建社会さらにはそれ以前の社会の狭隘な市場の制限のゆえに、生産は生産物の量より質に重点がおかれることにより、その生産方法・技法が経験と勘によって錬磨され、秘伝的なものに結晶せしめられ、独特の工芸的な生産物を生み出し、これを脈々と受け伝えている産業である。…… これら伝統産業は、資本制生産社会が成立するにおよんで市場は無制限的に拡大してゆき、生産は生産物の質中心より量的増大に力点に移り、経験や勘にたよる手工的な生産方法より自然科学の意識的適用に依拠した生産方法による大規模な機械制大工業、すなわち近代産業に推転を遂げるのである」と記している。

¹ 『総合的地域研究』第14号、1996年9月掲載。

² 一部は『総合的地域研究』第9号、1995年6月「タイの経済発展と農村間分業の形成：ヤソトン県の三角枕の事例」ですすでに紹介した。より詳しくは“Expansion of Cottage Industry in Northeast Thailand: The Case of Triangular Pillow in Yasothon Province”『東南アジア研究』33巻4号 1996年3月を参照していただきたい。

大衆品と高級品

日本語大事典や広辞苑の定義では近代に西洋から入ってきたものに対して昔から存在した工業という前近代性にポイントがあるが、宗藤・黒末では工芸という芸術性の方に力点がある。しかし、これらの定義では伝統産業が変化するものであるということが捉えられない。伝統産業には、生活必需品として大量生産化していくという方向と、少量生産で芸術性を高めていくという方向がある。例えば、インドネシアのパティックは手描き技法による少量生産の高級品と、スタンプによる廉価な大量生産品とに分化していく（関本参照）。より一般的には、安い原材料を使い、機械化して大量生産し安い価格で売る大衆品と、少量生産を徹底させて芸術品の域まで高められ高価な値段で売られる芸術品とに分かれて進化していく。このような現象はパティックの他に、日本でも南部鉄器など広く見られるところである。

このような分化が起こるのは「非伝統産業」すなわち近代産業の競争圧力が掛かってくるからである。近代的生産では低価格ではあるが質もそこそこというものが作られる。伝統産業が生き残るためには、技術導入・革新や機械化をして価格・質ともに近代工業に負けないものをつくる必要がある。しかも低価格化には大量生産が付き物であるので大衆化もする。上述のインドネシアの大衆向けのパティックはこの例である。定義に戻ると、このような大衆品は「近代的」生産方法を用いているので、「伝統産業」ではないのかもしれない。

しかし、伝統産業がこのような低価格化に成功することはそれほど多くはない。大抵は安価な輸入品が入ってきて大衆消費向けの伝統産業は破壊される。経済史的に伝統産業は近代化、植民地化とともに輸入品との競争に敗れ衰退していったと考えられている。これは大衆消費用の伝統産業が育たなかったと解釈できる。ところで、伝統産業が破壊されるという現象はどんなプロセスを辿ったのだろうか。輸入品を購入するということは、それが自発的な交換である限り人々にとってはメリットのある交換である。自由貿易論的に考えると、これは人々の効用水準の上昇を意味し、好ましいことになる。自由貿易に強制的に巻き込まれたとしても国民の生活水準を上昇させたのは、短期的には好ましいとという議論も成立する。ただし、この議論は、人々にとっては本当に自発的な選択であったのか、長期的にも望ましいものなのか、慎重に検討しなければならない。

植民地支配を自由貿易主義と見なし、現代のグローバル化にともなう自由貿易化がその再現

であるとする説があるが、これは歴史的経路依存性 (path dependence) の問題を無視している。伝統産業との関連で言えば、一旦破壊された伝統産業は再興するのは容易ではない。技術が失われてしまったからである。伝統産業が工業化の芽であったとすると、自由貿易はそれを摘み取ってしまったことを意味する。それを再興するためには輸入代替工業化という途上国経済にとっては重い負担を背負うことになったのである。自由貿易は、工業化という観点からは長期的にはマイナスに作用した。

さて、大衆消費財が輸入品によって破壊された後に伝統産業が生き残れるのは高級品の分野である。希少価値を持つために高い価格で売ることができるからであり、その規模は極めて小さくなる。これが伝統産業に芸術性を与える理由である。ただし、この分野でも生産技術の「近代化」が起こらないわけではない。例えば、西陣織は明治の初期に西洋からの技術を導入している。

伝統産業が生き残るもう一つの道は市場経済から遮断されていることである。織物の産地を求めて北タイや東北タイを歩いているとき、しばしば文化人類学者が研究対象とする村に辿り着いた。それらは少数民族の村であり、文化人類学者の研究対象と一致したのである。伝統的織物はこのような少数民族の村に残っているのだが、これらの村はある程度外部から遮断されていたから残ったのであろう。あるいはその布に込められた特別な意味が生き残っているからかもしれない。逆に言えば、伝統産業が消えていくのはその意味が時代に合わなくなってくるからであろう。

少数民族の村に限らずとも交通の不便なところにある村ではいまだに自給用の伝統産業が残っているところがある。しかし、交通の便が良くなるのに連れてそれも減ってきているようである。

国境も伝統産業を守る役割を果たす。ラオスやビルマを例に挙げよう。ラオスでは女性のスカートは伝統的織物を用いた「シン」と呼ばれるものをはいている。ビルマの場合には同様の「ロンジー」をはいている。これらの国の様子は西洋化してしまったタイと比べると印象的である。このような現象は、閉鎖的な経済体制を採ってきたこと、所得水準が低いこと、などの要因が働いているのであろうが、今後、どう変化していくのが興味深いところである。

伝統の復活

最近のタイの伝統的織物のように復活しているところもある。工業化がバンコクのような中

心都市に集中しているため地域格差が広がり、この問題を解消するために地域振興策の一つとして行われていることが供給側の要因である。一方、需要側（消費者側）の理由は、都市の人々がそれを求め始めたということである。週末に地方の産地に出かけて買い物をするというのが盛んになっている。都市生活がグローバル化というのが普遍化への流れであるとする、それに抗するために民族固有のものを求めている動きがであると考えられよう。

このような変化に対応しようとして農村内には様々なグループができ、政府がそれを資金・情報・技術などの面で支援をしている。例えば、技術研修センターのようなものを作り技術の普及に努めたりしている。民間の間でも自発的に技術の習得に努めている。ヤソトンの三角枕はシータン村を中心に生産されているが、この村の人たちは他の村に呼ばれ三角枕の作り方を教えに行っている。織物についても少数民族の村に行き行って教えてもらうというようなことが行われている。このようにして織物の技術もしばしば移転する。ある少数民族固有の織物というのが曖昧になってきている。あるいは、昔から曖昧だったのかもしれない。問題なのは、伝統産業のブランドが定着する期間である。

[参考文献]

関本照夫「インドネシア近代のパティック産業の事例 -文化の自画像の生成-」『総合的地域研究』1995年9月、No. 10.

宗藤圭三、黒末巖『伝統産業の近代化——京友禅業の構造——』（有斐閣 昭和34年）